

『あるバーにて』

○登場人物

坂田二郎

佐々木ふう

鷺尾和男

児玉太一

鈴木聡

小窪啓介（クボと呼ばれている）

////////////////////////////////////

バーにて。

映画『カサブランカ』がテレビモニターに流れている。

カウンター奥に、坂田、ふうが立っている。

カウンターの席には、鷺尾、児玉、少し離れて鈴木が座っている。児玉は、グラスを持っている。

ふう、鈴木の水イスキー用のロックを作っている。

鈴木「（モニターを見て）わ、カサブランカ？」

ふう「はい、そうです。」

鈴木に水イスキーを出す。

鈴木「（飲みながら）ハンフリー・ボガード、かつこいいなあ」

坂田「鷺尾くんはビールだよ」

鷺尾「あ、はい、すみません」

坂田「ふうちゃん」

ふう「はい」

ふう、鷺尾にビールを渡す。

その間に、マスター、自分用のウイスキーを注いでいる。

坂田「じゃ、鷺尾くんから、一言どうぞ」

鷺尾「えっ、僕ですか」

坂田「ですよ」

鷺尾「そっか、じゃあ、今日はお集りいただき、ありがとうございます。乾杯！」

坂田、児玉、鷺尾「カンパイ」

坂田「あ、それと、写真集の出版、おめでとう」

皆、いっせいに飲む。一息あって

鷺尾「ありがとうございます」

坂田「鷺尾君みたいなひとがいるって言って、写真集見せたら、ぜひ児玉さんが呼んでこいて」

児玉「なんか、ぶしつけで、すみません」

鷺尾「いえいえ」

児玉「こっちに住んで何年に？」

鷺尾「もう、2年になりますね」

児玉「どうしてまたこっちに？」

鷺尾「…えーと、まあ、いろいろありまして」

坂田「初めてきたときは、紹介状を持ってきたんだよ」

児玉「え、ここに？」

坂田「そうそう。そうしたら、紹介されたお店じゃなくて」

鷺尾「すみません。地図を読みまちがえちゃって」

坂田「あの辺りは、立ち退きにあっちゃったからね」

ふう、鈴木グラスが空きそうなのを見て、

ふう「鈴木さん、何にします？」

鈴木「(すでにできあがっているようで) あれ、えーと、何にしよっかな」

鈴木「あの、ほら、炭酸水で割るやつ、ウイスキーを」

ふう「ハイボールですか」

鈴木「そうそう、ハイボール。あ、頭韻だ。ハンフリー・ボガード、ハイボール(メモを取る)」

坂田「(鷺尾に) 彼はね、自称詩人なんだよ、普段はハンコ屋やってるんだけどね」

鷺尾「へー」

鷺尾「(はんこを彫るジェスチャーで) 彫ってるんですか？」

鈴木「そうそう、墓穴をね」

鷺尾「(いきなりテンション高く) え！はんこじゃなかとですかー！」

鈴木「ははは」

鷺尾「すみません」

鈴木「よか、よか」

児玉「いま、どこに住んでるんですか？」

ふう、ハイボールを持ってくる。

鷺尾「女(め)の都(と)に」

鈴木「やっぱり名前に惹かれて？」

鷺尾「いやいや。あの、妻が住んでて…、転がり込んだんです」

児玉「え、鷺尾君、結婚してるの？」

鷺尾「ええ、実は、そうなんです」

坂田「いま、奥さん、お腹が大きいんだよ」

鈴木「いやー」

と、鈴木、さりげなく鷺尾に向かってグラスを出し。

鈴木「君の瞳に乾杯」

鷺尾「え、どういうことですか？」

鈴木、映画の映っているモニターに視線をやる。

鷺尾「映画のせりふか」

鈴木「ひとは見かけによらないね」

児玉「僕も驚きました。いやあ、めでたい」

鷺尾「恐縮です」

児玉「鷺尾さん、普段は、何やってるんですか？」

鷺尾「結婚式場で働いてます」

児玉「カメラマンとして？」

鷺尾「そうです、契約社員なんですが・・・」

鈴木「奥さんは何してるの？」

鷺尾「いま、産休中ですけど、市役所で働いています」

児玉「なるほど」

鈴木「そりゃ、いい。奥さんにしっかり稼いでもらいなさいよ」

鷺尾、聞きながら、うなずいている。

坂田「今日は大丈夫？」

鷺尾「ええ、今週は、実家に帰ってるんです」

そこへ、男が入ってくる。

坂田「やあ、クボさん」

小窪「トイレ、借りていい？」

坂田「どうぞどうぞ」

坂田「ふうちゃん、おしぼり」

ふう「はい」

坂田「鷺尾くん、ビール？」

鷺尾「あ、はい」

児玉「じゃあ、僕も。これと同じの」

坂田「ふう、」

ふう「（知ってますよといわんばかりに）はい」

坂田「…」

小窪、トイレから出てくる。

ふう、小窪におしぼりを渡す。

ふう、鷺尾のビールと児玉のウイスキーを出す。

ふう「なににします」

小窪「山崎をロックでもらおうかな」

ふう「ちょっと待ってくださいね」

小窪、うなずきながらタバコに火をつけている。

児玉、小窪のタバコの煙に咳ばらい。

鷺尾「ところで、児玉さんは何をされてるんですか？」

児玉「僕は、船の設計をやってるんですよ」

鷺尾「ああ」

坂田「長崎っばい職業でしょ」

鷺尾「ですね」

坂田「天下の三菱さんですよ」

児玉「いやいや」

ふう、小窪に山崎を出す。

小窪「(ふうに) バンド、まだやってるの？」

ふう「はい」

小窪「じゃあ、チケット」

ふう「？」

小窪「ほら、今度のライブの」

ふう「来てくれるんですか」

小窪、タバコをくわえながら、うなづく。

ふう「わあ、ありがとうございます」

ふう「奥さんに怒られないですか？」

小窪「うちは夫婦円満だから」

ふう「(チケットを渡し) じゃあ、これ」

小窪、財布からお金を出す。

小窪「いくら？」

ふう「2-5-です」

小窪、3千円、出す。

ふう「毎度あり」

小窪、くわえ煙草で、気にするなと手を振る。

ふう「じゃあ、これもよかったら。チラシです」

小窪、受け取る。

児玉「いま作ってる船がね、これなんだよ（ポケットから完成間近の船の写真を出す）」

鷺尾「おお」

鷺尾、坂田に渡す。

坂田「（老眼鏡をかけ）大きかですねー」

鷺尾「フェリーですか？」

児玉「そうそう」

児玉「でね、これが図面」

鷺尾、図面を見る。

児玉「昔は手書きだったんだけどね」

鷺尾「ああ、よく見る、斜めの机の」

児玉「そうそう」

児玉「でも、いまじゃ全部コンピューター」

鈴木「なんか流行歌の歌詞みたいだね」

児玉「え？そうですか。鈴木さんどうぞ」

坂田、写真を鈴木に渡す。

鈴木「（見ながら）でも、いまじゃ全部コンピューターさ」

坂田「クボさん。そういえば、今朝の朝刊。朗読会の記事、あれ、クボさんでしょ？」

小窪「ああ、よく分かりましたね」

坂田「やっぱり」

ふう「どんな記事ですか？」

小窪「原爆の手記を定期的に朗読している、市民グループの記事」

ふう「クボさん、原爆に関する記事、多いですね」

小窪「まあ、地元の新聞だからねえ。うちがしっかりやらないと、どこもやってくれないから」

坂田「（新聞を持ってきて）ほら、ここここ」

ふう「（新聞を受け取り）最後に朗読した北条あやかさんの力強い声がホール内に響き渡ったとき、聴衆はその言葉にじっと耳を傾けていました。朗読会には、原爆を経験していない、若い世代も多く参加しています。年々、被爆者の人数が少なくなっていく中、戦後生まれの人たちが中心となって、被爆体験を語り継ぐ方法を模索しつづけています。へえー」

鷺尾「急に話、変えていいですか？」

児玉「もちろん」

鷺尾「さっきの、なんでこっちに移り住んだか、ってことなんですけど」

児玉「ああ、さっきのね」

鷺尾「あの、こんな話、初対面の方にすべきじゃないかもしれないんですけど…」

児玉「いや、いいよ。気にしないで」

鷺尾「2年前、東京オリンピックが決まったじゃないですか？」

児玉「うん」

鈴木「（紙を出す仕草をして）TOKYO」

鷺尾「で、その頃、東京では、オリンピック招致用のポスターが、いたるところで貼られてたんです」

児玉、スマホを出して、調べる。

児玉「これ？」

鷺尾「そうです、そのカラフルな花柄のポスターです」

鷺尾「で、僕がある写真を撮ろうとしたときのことなんですけど」

鷺尾「あの、もう一杯飲んでいいですか？」

児玉「どうぞどうぞ」

しばらくして、ふう、鷺尾の前にビール。

鷺尾「すみません」

鷺尾、いきにあおって・・・

鷺尾「その招致用のポスターが等間隔で、ずらーっと両側に貼られている地下通路があったんです」

児玉「ええ」

鷺尾「で、その通路に寝そべってる人がいたんです」

鷺尾「家のない人です」

鷺尾「僕は、そのとき見た光景が、対比に見えたんです」

児玉「対比？」

鷺尾「そうです、オリンピックと地下通路、二つのリアリティーの対比です」

児玉「ふーん」

鷺尾「とにかく、いまこの瞬間をあらわしてるなあって」

児玉「うん」

鷺尾「撮らないと、すぐに忘れられてしまうなあって、カメラを持ったんですけど、急に手が止まってしまったんです」

鷺尾「あの、笑われるかもしれませんが…」

鷺尾、再び少し口に含む。

鷺尾「その寝そべっている人の身体（からだ）、その人の身体の輪郭が、あいまいなまま、目の前に現れたんです。おかしいでしょう？」

鷺尾「すみません、僕だけしゃべって」

兎玉「いや、いいんだよ」

鷺尾「それから、その出来事が頭から離れなくて」

兎玉「そうなんだ」

坂田「そんな話、僕も初めて聞いたよ」

鷺尾「ええ、誰にも言ったことがなかったんですが」

鷺尾「それから、どうしても、写真を撮ることができなくなったんです」

鷺尾「被写体として対峙しているものは何なのかっていうことが、途端に分からなくなってしま
って。それで、もう写真はやめようって」

鷺尾「それから、ずっと家に閉じこもってたんです。そしたら、大学時代の先輩がたずねてき
て、長崎の出版社に紹介状を書いたから、行けて」

鷺尾「正直、僕も最初は戸惑ったんですけど、このまま家にいて、しんどい思いをしているよ
りましかなと思って」

鷺尾「でも、来てみたらその場所はなくなっていたんです」

鷺尾「そうした縁で、いま、ここにいるんです」

小窪「君」

鷺尾、考えこんでいる。

小窪「君」

坂田「鷺尾くん」

鷺尾「あ、すみません」

小窪「いま君が提起してくれたことは、私たちが他者とどう向き合うかっていう問題だと思うんだ」

鷺尾「はい」

小窪「僕と君がそうであるように、身体と身体はわかれている。お互い何を考えているか分からない。この『距離感』をどう考えるか。もっと言えば、他者に会うとき、この距離感のなかで、私たちは常に倫理が問われているんだよ」

鷺尾「僕は難しいことは分かりません。ただ、得体のしれない他者に出会って、そこから逃げだしてしまっただけです」

児玉「鷺尾君は逃げたって言うけど、その行動に何か意味があるんじゃないかな」

鷺尾「(グラスを持って) とにかく、東京にいるときにやっていた、世界を切り取るために、カメラを向けていたのは間違いだったんですよ！(グラスをどんっと置く)」

間

鈴木「鷺尾！」

鈴木「(空をはさみで切って) 世界を切り取るなんてできやしないよ」

坂田「鈴木さん」

鈴木「(と映画の流れているモニターを見て) ほら、ラストシーンだ」

鈴木「しばらくカサブランカから消えろよ。レジスタンスの支部へ送ってやる。—賭けの1万フランもいただくぜ。それは俺たちの費用だ。—俺たち？—これが友情のはじまりだな」

了